

発行所 福島県中学校教育研究会社会科研究部
 発行人 鈴木 豊
 発行 令和6年3月1日

- 令和5年度の研究成果及び
令和6年度の研究主題・副主題の解説… 2～4
- 県大会参加分科会担当表 …………… 4

あいさつ

福島県中学校教育研究会社会科専門部長 鈴木 豊



今年度は、研究主題「持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を育む社会科の指導はどうすればよいか」のもと、副主題「多面的・多角的に事象を捉え、考察する力を育てる授業の工夫」について研究を進めて参りました。

4年ぶりに参集する形で開催となった10月の県中教研研究協議会いわき大会は、いわき支部の研究主題・副主題に基づく授業づくりを参加者が実際に参観するとともに、各支部の研究実践について直接的に意見を交わすことができ、意義深い大会になったと感じています。準備を進めていただきました関係者の皆様、特にいわき支部の皆様にご心より感謝申し上げます。また、各支部における中教研の活動も、過去3年間と比較すると活動の幅が広がってきたように感じています。各支部の実情を踏まえながら工夫して研究に取り組んでいただいたことに改めて御礼申し上げますとともに、今年度の研究成果と課題を次年度以降につなげてほしいと思います。

さて、昨年度から新たな研究主題に基づき研究を推進していますが、今年度の副主題にある「考察する力」は、部報で「現実社会における生徒を取り巻く多種多様な課題に対して、『それをどのように捉えるのか』『それとどのように関わるのか』『それにどのように働きかけるのか』を問う中で、それらの課題の解決に向けて自分の意見をまとめることのできる力」と示されています。11月に開催された「第56回全国中学校社会科教育研究大会栃木大会」では、「社会を見つめ、社会と関わる力を育む社会科学習の創造」の研究主題のもと、「社会を見つめ、社会と関わる力」を、日常生活でも事実やより確かな情報に基づいて、社会的な見方・考え方を働かせ、多

面的・多角的に考察することで「よりよい社会とは何か」「よりよい人生とは何か」を自問し続ける力と捉えていました。そして、どうすれば社会を見つめ、社会と関わる力が身に付くのかを、批判的思考の育成と批判的思考態度の育成の二つの視点から、授業を通して追究しました。栃木県が重視している「『よりよい社会とは何か』『よりよい人生とは何か』を自問し続ける力」は、本県が育成を目指す持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力の一つであると考えます。各支部におかれましては、子供たちが社会的事象に対して社会的な見方・考え方を働かせて問い（疑問）をもち、考察するとともに、よりよい社会について問い続ける授業の創意工夫を図ってほしいと思います。

次年度は、新たな副主題「協働的な学びを通して、新たな価値を創造する力を高める授業の工夫」に基づき、研究を推進していくこととなります。本来ならば研究3年次にあたる次年度は、研究のまとめの年となりますが、社会科に関しましては、令和8年度に開催予定の「第59回全国中学校社会科教育研究大会福島大会」を見据えて、令和6年度の研究主題・副主題を3年間継続することとなります。持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を育むために、これまでに育成してきた「主体的に学ぶ力」や「考察する力」を基盤として社会的な見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら最適解を吟味し、検討を重ねる中で「新たな価値を創造する力」を育成する研究実践を積み重ねてほしいと思います。そして、初めての分散開催となる県中大会が充実した研究協議会となることを期待しています。

結びに、令和5年度の事業にあたり、ご理解・ご協力をいただいた役員並びに会員の皆様にご心より感謝申し上げます。あいさつとさせていただきます。

令和5年度福島県中学校教育研究会社会科研究部組織一覧

部長 鈴木 豊		副部長 大和田康夫 ・ 相馬 慶二 ・ 本多康夫 ・ 青田亮一 ・ 新家弘久				
支部	支部長名	勤務校	支部	支部長名	勤務校	
福 島	鈴木 豊	信 夫 中	東西しらかわ	川口 和彦	東 中	
伊 達	阿部 裕好	伊 達 中	北 会 津	藤田 信一	大 戸 中	
安 達	大和田康夫	二本松二中	耶 麻	本多 康夫	塩 川 中	
郡 山	相馬 慶二	守 山 中	両 沼	本多 康弘	新 鶴 中	
岩 瀬	濱津 太	天 栄 中	南 会 津	室井 正之	田 島 中	
石 川	村上 且吉	玉 川 中	相 双	青田 亮一	なみえ創成中	
田 村	大竹 英樹	岩 江 中	い わ き	新家 弘久	小名浜二中	
事務局 総務	高橋 卓史 (附属中)		庶務	角田 直之 (福島二中)		
			会計	三瓶 達也 (渡利中)		

研究主題及び研究副主題の解説

1 研究主題及び研究副主題

研究主題

持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を育む社会科の授業はどうすればよいか

研究副主題

- 令和4年度 「社会的な見方・考え方を働かせ、主体的に学ぶ力を育てる授業の工夫」
- 令和5年度 「多面的・多角的に事象を捉え、考察する力を高める授業の工夫」
- 令和6年度 「協働的な学びを通して、新たな価値を創造する力を高める授業の工夫」

2 令和5年度の研究成果

研究3年次である令和6年度は、研究1・2年次の成果と課題を踏まえて、研究を推進する。

(1) 研究2年次の成果

県大会での提案授業や研究協議、各支部での取組を通して確認されたことは以下の通りである。

【課題把握の場面】

- ・ 単元構想図などを活用して、「単元を貫く学習課題」と1単位時間の「学習課題」を吟味し、つながりをもった指導ができた。
- ・ 「どのようにすべきか」や「どうあるべきか」など未来志向型の学習課題を設定し、生徒に選択・判断させ、考察する力を高めることができた。

【課題追究の場面】

- ・ ICT機器や思考ツールを用いることで、思考が可視化されたり、多面的・多角的に生徒が考察できたりするように工夫がなされてきた。
- ・ 学習形態を工夫し、話し合いの場面を意図的に設定することで、生徒の考察する力を高める実践がなされた。

【まとめ・振り返りの場面】

- ・ ノートやワークシート、振り返りシートを積極的に活用しながら、学びを蓄積し、多面的・多角的な考察をしながら、単元の最後には自分の考えを練り上げる場面を設定することができた。

(2) 今後の課題

令和5年度の研究実践を通して明らかになった課題は以下の通りである。

【課題把握の場面】

- ・ 社会が直面している問題に対して、未来志向の問いを立て、生徒が探究できるような指導計画を設定する必要がある。
- ・ 研究主題である「持続可能な社会の実現」に向けて具体的な発信を目標として行う実践が少なかった。
- ・ 単元構想図等を設定し、単元を通して何を身に付けさせ、どのような姿になってほしいか授業者が学習の見通しをもてるようにする。

【課題追究の場面】

- ・ 生徒の思考力・判断力・表現力を高めるためにはどうすればよいか、従来の授業のよさに加えてICT機器の効果的な活用方法を模索していく必要がある。
- ・ 校内での学びだけでなく、外部機関との連携を単元

の指導に組み込み、より深い学びを創造していくことが課題である。外部機関との連携を図る授業を進めていきたい。

- ・ 見方・考え方を働かせ、資料を読み取り、生徒の考えをもとに協働して、考えを練り上げるための学習形態の工夫を、今後はより一層吟味していく必要がある。
- ・ 生徒のつぶやきや素朴な疑問などを拾い上げて、問い返しをしながら、学びをコーディネートする力を高めていく必要がある。

【まとめ・振り返りの場面】

- ・ ICT機器を使用する意図を吟味し、アナログとデジタルのそれぞれのよさを生かす使用方法を検討していく必要がある。
- ・ 学んだことを積極的に外部に発信しながら、最適解を見いだす場をさらに設定していきたい。

3 令和6年度の研究副主題の解説

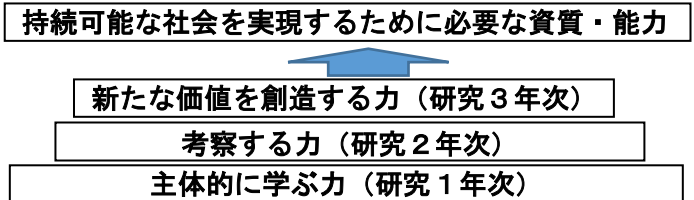
(1) 研究主題との関連

持続可能な社会の実現に向けて必要な資質・能力を育むため、1年次では「主体的に学ぶ力」、2年次は「考察する力」に重点をおいて研究を進めてきた。各支部の成果として見方・考え方を働かせながら、社会的事象を多面的・多角的に考察する力が育成されてきていると言える。そこで3年次は、これまでに獲得した力をもとに、研究主題に迫る。

そのためには、社会的事象を見方・考え方を働かせながら多面的・多角的に考察するだけではなく、他者と協働しながら最適解を吟味し、検討を重ねる中で、新たな価値を創造する必要がある。研究1年次から育成してきた資質・能力を基礎としながら、変化の激しい予測困難な時代においても「持続可能な社会」を実現するためのたくましい生徒を育成する社会科授業を構想していきたい。

例えば、地理であれば地域の課題を解決するための方策から地域の未来について考えを深めさせる。歴史であれば時代背景をもとにしながら現在とのつながりを考察させる。公民であれば持続可能な社会のために私たちや社会は何をすべきかなどを選択・判断させる。その上で、自己と実社会が密接に関係していることを実感させ、新たな価値を創造する生徒を育成することが考えられる。

【主題・副主題関連図】



(2) 副主題の解説

① 3年次の研究の方向性

研究3年次では、1・2年次の成果である社会的な見方・考え方を働かせることを前提にし、その上で、新たな価値を創造することで主題に迫りたい。

② 協働的な学びとは

中学校社会科においては、各分野の特質に応じた見方・考え方を働かせて学ぶことにより、事実等に関する

知識を相互に関連付けて概念に関する知識を獲得したり、社会的事象からそこに見られる課題を見いだしてその解決に向けて、多面的・多角的に考察、構想し、表現したりすることが重要である。そのために、他者との意見交換や議論を通して、最適解を見つけていくことが重要である。したがって、生徒一人一人が個々に考察し、課題に対して結論づけるような学びではなく、他者との対話を通して、考えを広げたり、深めたりする活動のことを協働的な学びととらえる。

③「新たな価値」について

「新たな価値」については、中学校学習指導要領解説社会編で、「急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される」と示されている。変化が激しく予測困難な時代においては、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成する」などして新たな価値につなげていくことが記載されている。

これまでに育成した主体的に学ぶ力や、議論や課題追究に耐える資料から多面的・多角的に考察し根拠ある主張につなげる力を基礎に、対話と協働をもとに最適解を模索し、「新たな価値」を創造できる力を育成したい。

また、ここで示す「新たな価値」とは、グローバルな規模でのイノベーションのような大規模なものに限られるものではなく、地域課題や身近な生活上の課題を自分なりに解決し、自他の人生や生活を豊かなものとしていくという様々な工夫なども含むものである。

④「創造する力」について

「新たな価値」を「創造する力」とは、様々な考え方が交錯し互いに影響を与え合う多様性の中で、新たなアイデアが生まれ、既存の枠を越えた知の統合をしていく力のことである。

「創造する力」とは、ある社会的事象について考察する際に、これらの事象について多面的・多角的に考察する中で、生徒同士や他者と関わる過程を通して、新たな考えを生み出す力や課題解決にむけての最適解を模索する力と捉えることができる。このためには、1年次で育成した「主体的に学ぶ力」や2年次で育成した「考察する力」が重要となっており、これらを基礎として社会科の見方・考え方を働かせる必要がある。

(3) 「新たな価値を創造する力を高める授業の工夫」 のための手だてについて

以下に手だてをあげるが、あくまで一例であり、各支部で工夫しながら取り組んでいただきたい。

【課題把握（社会を見つめる）場面】

<探究的な課題の設定>

課題把握の場面においては、課題の設定、資料の収集と読み取り、考察、構想とまとめ、といった手順を踏まえて課題解決ができるような課題を設定する。また、探究的な活動を通して、生徒が「新たな価値」を創造できるようにしたい。その際の手立てを以下に示す。

ア 未来志向型の学習課題を設定する。

創造した「新たな価値」が将来、自分や社会とどのように関わることができるかを実感できる課題ならば、自らの課題意識を出発点として課題追究の原動力となる。このために、「今後どうしていけばよいか」や「どのようにすべきか」といった自ら選

択・判断することに関連づけられるような課題を設定する。

イ 地域や社会が直面する課題の解決に向けた課題を設定する。

身近な社会において解決すべき課題や現在の社会で問題になっている事象をもとに学習課題を設定することで、「新たな価値」の創造につながる。また、歴史的分野においては、当時の社会が直面した課題について考察することが重要である。

ウ SDGsの17の目標と関連付けた学習課題を設定する。

今日的な課題との関わりを通して、追究意欲を高めたり、「新たな価値」の創造につなげたりすることができる。

エ 単元を貫く学習課題を効果的に設定する。

単元の指導計画を明確にし、単元構想図を作成するなどし、各学習段階で自己の考えと他者の考えを共有し、検討する「協働」の場面を意図的に設定できるような単元を貫く学習課題を設定する。例えば、「パフォーマンス課題」や「地域の課題を考える」などの課題が考えられる。

このように、課題把握の段階においては、課題設定の工夫等を行い、「新たな価値」を創造しようとする意識と必然性をもたせることが重要である。単に、知識や技能を習得するだけではなく、自己と社会がどのように関わっているかが実感できるような学習課題を設定していきたい。また、生徒の実態把握のために、ICT機器を活用して事前にアンケートをとり提示するなど生徒の認識を把握した上で学習課題を設定することも有効である。

【課題追究（社会と対話する）場面】

<対話と協働の場の設定>

課題追究の場面においては、新たな価値を創造するために、対話と協働をもとにした議論を課題追究の場面に設定する。議論の場を通して、自己の意見と他者の意見を交流することが重要なプロセスになる。例えば、中間発表、ディベート、議論、プレゼンテーションなど、生徒の「対話と協働」ができる場を設定することで個々の意見が深まる。その際の手立てを以下に示す。

ア 自己の考えを明確にする場面を設定する。

生徒が資料をもとに多面的・多角的に考察し、根拠をもった考えをもつことができるような場面を設定する。自己の考えをしっかりとち他者と協働する中で、さらなる「新しい価値」が創造される。そのためにも、生徒一人一人が自己の考えをもつことが重要であり、そうした場面を確実につくりたい。

イ 学習形態を工夫する。

「新たな価値」を創造するためには様々な視点や立場から社会的事象について考察することが必要である。そのために、意図的にグループを編成したり、ジグソー法の手法を用いたりすることも有効である。また、討論やディベートを通して異なる立場での議論を行わせることも有効である。

ウ 外部人材を活用する。

授業におけるゲストティーチャーの活用や校外での調査活動など学校外の機関を積極的に活用することで、生徒の考える視点が広がり、新たな気づきにつながる。市役所等の行政機関、博物館、大学教員などの専門家、保護者や地域の方などの教員以外の人材を積極的に活用する。

エ Web 会議システムなどのICTを効果的に活用する。

双方向で対話可能なWeb 会議システムなどICTを積極的に活用し、遠隔地の専門家や地域の人との対話や協働を促進する。時間的・距離的な制約がある場合も、これらのICTを活用することで専門家や当事者の意見を聞き、協働的な学習を行うことができる。

オ 精選した地域教材を活用する。

歴史的な分野など、生徒と社会的な事象の時間軸的な距離が遠い場合でも地域の資料を活用することで、当時の人々の考えや行動を考察し、現在の社会と比較しながら「新たな価値」を創造することができる。ただし、単に地域話題を取りあげるのではなく、単元指導計画の中において、扱う意義や効果を検討し、適切に活用したい。

このように、課題追究の場面においては、生徒が多面的・多角的に捉えた社会的な事象を考察しながら自己の意見をもち、他者と「対話と協働」する中で考えを深めることが重要である。この場面では、これまでの研究にも見られたように学習形態の工夫をしていきたい。特に、自己と他者の意見の相違や共通点をきっかけとして、考えを深められるようにする。このためにも、生徒同士だけではなく、学校外部の機関と積極的に連携しながら課題追究を行っていききたい。

【まとめ・振り返り（社会とかかわる）場面】

<最適解を模索する場面の設定>

まとめ・振り返りの場面においては、単元や1単位時間の学びをもとに、自分なりの最適解をもつための時間を設け、生徒一人一人に「新たな価値」を確実に芽生えさせたい。これまでの学習の中で獲得した知識・技能や他者との協働的な学びの結果を踏まえて、自己の最適解をもつ時間をしっかりと確保する。その際の手立てを以下に示す。

ア 振り返りシートやポートフォリオなどの継続的な活用で新たな価値を意識できるようにする。

新たな価値を創造するためには、学びの振り返りや学びの蓄積が重要である。したがって、生徒の学びの振り返りのための材料を工夫したい。また、学びの記録から単元や1単位時間内での考えの変化を見取り、学習評価につなげたい。

イ 学んだことがと実社会とが結びついていることが実感できるようなまとめ方をする。

まとめ方においても、これまでの学びが実社会と結びついていることが実感できるように、十分な時間を確保しつつまとめを行わせることで、生徒に「新たな価値」を実感させる。例えば、地理的分野での地域課題解決のための提言や、公民的分野での地方自治の在り方についての子供なりの提言だけでなく、歴史的な分野における過去と現在の比較から過去を考察するなど、実社会とのつながりを意識させるまと

めをしたい。

ウ 自らの学びを外部に発信する。

自らの学びを外部に発信することで、考えを深めたり、広めたりすることができる。そのため、多様な人との意見の検討を行い、協働的な学びを実現したい。例えば、公民的分野においては、地方自治の学習で、地域の課題について考え地方公共団体に提言をする活動を通して、地域との対話と社会参画意識を高めることができると思う。

このように、まとめ・振り返りの段階においては、自己と実社会との関わりを実感できるような発信の方法も重要である。さらに、単元のまとめ・振り返りの場面においては、これまでの協働的な学びを通して、獲得した「新たな価値」を外部に発信したり、他者の考えと比較したりする中で、社会参画意識を含めた「新たな価値」を創造したい。

これらの学びを通して、予測困難な時代における最適解を模索し、「新たな価値」を創造し、「持続可能な社会の実現」に寄与する生徒の資質・能力を育成したい。

7 3年次の研究計画と研究分野

(1) 研究計画

- ① 主題報告（5月末まで 各支部）
 - 主題の共有 ○ 支部研究計画の立案
- ② 支部研究協議会（7月下旬まで 各支部）
 - 研究実践の経過報告と今後の予定の確認
- ③ 県研究協議会県中（郡山）大会（10月）
 - 公開授業（郡山支部の中学校）
 - 代表支部の研究発表と協議
- ④ 県大会報告（10月～11月 各支部）
- ⑤ 研究部報第57号の発行（3月）
 - 本年度研究のまとめと次年度の確認

(2) 研究分野

- 1学年 } 各自が地理的分野と歴史的な分野の
- 2学年 } いずれかを選択
- 3学年 } 各自が歴史的な分野と公民的分野の
- } いずれかを選択

《参考文献》

「中学校学習指導要領解説社会編」文部科学省 東洋館出版社
 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
 国立教育政策研究所教育課程研究センター
 「見方・考え方 社会科編」澤井陽介 加藤寿朗 東洋館出版社
 「教育科学 社会科教育」明治図書「授業の見方」
 澤井陽介 東洋館 出版社
 「小中社会科授業づくり」澤井陽介、唐木清志 東洋館出版社
 「見方・考え方を働かせる発問スキル50」川端裕介 明治図書
 「単元を貫く『発問』でつくる中学校社会科新授業&評価プラン」
 内藤圭太 明治図書
 「思考ツール×パフォーマンス課題でつくる中学校社会科授業」
 七里広志 明治図書
 「深い学びに導く社会科新発問パターン集」宗寅直樹 明治図書

各支部代表の参加分科会配当表 ○=参加 ●=発表

		福島	伊達	安達	郡山	岩瀬	石川	田村	東西 しらかわ	北会津	耶麻・ 両沼	南会津	相双	いわき
R6	地理	●		○	○	○						●	○	
	歴史	○			○		●	○					●	○
	公民		●		○				○	○	○			●

- ① 各分野に5～6支部を配当する。 ※会員数が30人以下の支部は1人、60人以上は3人からの参加とする。
- ② 発表数は2支部とする。 ③ できるだけ均等にする。数・地区に偏りがないようにする。
- ④ 3年間で1度は発表があたるように配慮する。